

平成28年7月29日(金)

老球の細道253

バスケットボール選手の才能を伸ばす

会津バスケットボール協会 室井 富仁

リオデジャネイロ五輪がもうすぐ始まるようだが、男子五輪最終予選で敗退した日本代表は出場できないので残念。男子の最終予選は、日本の特色を活かしスピードで、組織プレイでとジャパンオリジナルを標榜していたが、テレビで見る限りでは日本代表が最もスピードが遅く、組織力も戦略も十分機能していなかった。日本と対戦したラトビアやチェコにもスピードで劣り、日本のお家芸と言われたアウトサイドシュートにおいては決定的な差が感じられた。男子日本代表はこれからどのような戦い方で世界に通用するチームに仕上げていくのか、どのようにして世界に通用する選手を育てていけばよいのだろうか。

朝日新聞では最近「オリンピックの育ち方」といった特集記事が生まれ、世界で通用する選手の才能を育てる方法を3人の専門家がコメントを載せていた。

東大医学部出身の精神科医の和田秀樹さんは「オリンピックに育つ人と受験勉強で育つ人には3つの共通点がある」と指摘する。一つ目は、できることに会うこと。「出会いはラッキーに見えて、実は親がけしかけている場合が多い」。二つ目は、成功体験を積み重ねさせること。「勉強もスポーツも、テクニックを身につけさせて『自分ではできるんだ』というルールに乗せる必要がある」。三つ目は、実力を伸ばす正しい方法を身につけること。そして何と言っても能力を伸ばすためには「絶対に五輪選手になれる」「絶対に東大に合格できる」といった根拠のない自信も重要だと説いている。

陸上元五輪選手で順大教授の山崎和彦さんは「英才教育は必ずしも正しいとは限らない。成長には個人差がある」と指摘する。日本陸上の五輪選手で中学時代から全国大会で入賞(8位以上)していたのは2割しかいなかったそうである。山崎氏は「幼少期は成果主義にならず、スポーツの楽しさを知ること、様々な競技を経験することが大切だ」と話す。

JOCのキャリアアカデミー事業で選手の研修やカウンセリングを担当している小川みどりさんは、選手の早熟化からさらに成長するためには選手を導くコーチを育てる土壤が重要であるという。小川さんは「今の日本はコーチ業だけで食べていける環境ではない。行政や企業、地域とも連携しながら、コーチの待遇や力量を上げることが、多くのオリンピックの育成につながる」と。バスケット界においてもこの問題は大きい。ミニバスで育てられた選手が、その後中学、高校とどれだけ充実した指導を受けているのだろうか。

最後に私見を述べたい。今秋からプロリーグが統一されて「Bリーグ」がスタートする。いつまでもインサイドは外人、アウトサイドは日本人の構図を繰り返してはいけない。サッカーの後追いになるのは悔しいが、日本人選手たちがNBAだけでなくヨーロッパのプロリーグにも進出して世界の高さ、スピード、強さを体で学んできてほしい。そしてミニから高校時代までの育成年代を指導する指導者やトップアスリートをさらに成長させるトップコーチの指導力の向上と待遇改善を切に望みたい。私はこの分野で微力を尽くす。

現在わが盟友トステイン・ロイブルがU-18男子代表を引き連れてイランのテヘランにおいてU-18世界選手権アジア予選を戦っている。予選は今のところ順調に勝ち進んでいるようだ。大会終了後に8月13日、14日と会津に講習会でやって来る。この時に彼から世界レベルの話聞けるのが今から楽しみである。